

わたしが修行した道場の老師さまは、今年で八五歳になるのだろうか。長年の坐る生活からか「足が痛い痛い」とはおっしゃってますが、お元気です。すでに隠居生活ですが、それでも夏は三時、冬は四時に起床の生活。そんな生活をずつと続けている。妻帯しているわけではなく家族もおられない。外出もそう多くはない。四季の変化があるとはいえ、単調です。単調だから、時々生活にアクセントをつけるのが上手な方です。

たとえば、数ヶ月にいちど、愛用のお茶碗を変える。あるいは、机の向きを変える……。頻繁に変えては迷いますが、絶妙の間合いで変えて、生活のリズムを調えているように見えました。生き方の名人です。

ところで、皆さんにお届けする、寺報のスタイルを少し変えてみました。

編集後記

お盆号までは、A3版見開きの普通の体裁でした。今回は、ご覧のような具合です。「読みにくく」と思いつらぬ、この編集後記までたどりついて読んでくださってありがとうございます。

封筒も色やデザインを時々かえています。いつも同じ封筒で同じ葉書の方が、ちよつと見ただけで「寺からだ」とわかるから「変えないで」、なんて声も聞きます。

仏教のメインテーマの一つに「無常」があります。すべてのものは、常に変化して、なにひとつ永遠なものなどありはしないと、仏教は教えます。だから、変えている、というわけではないのですが、寺からの便りを受け取って「変えたな」とにんまりしてくれる人もいます。思い、貧弱なアイデアをひねり出しています。中身が薄いから、外見からいはたまに着替えないとね。

前にも書きましたが、数年前から、伽羅（キラ）や沈香（シンコウ）などの香木が高騰しています。なぜかという、パリの香水に飽きたアラブのお金持ちが買い占めているから。それにもめげずに松岩寺の本堂では上質な沈香を焚いているからご法事の時など、香りを楽しんでください、と書いたことがあります。

高値にめげたわけではないのですが、最近には白檀（びやくだん）の粉末や丁子（ちようじ）・桂皮（けいひ）・竜腦（りゅうのう）などの薬香もときどきゆらしています。

桂皮と書いてもなじみがないけれど、シナモンといえはわかるでしょうか。八角も中華料理の香料で英語ではスターアニス。地中海沿岸にはアニス酒というリキュールがあって、その香料といえはおわかりになる方もあるのでは。

さて、本尊さまやお仏壇にお茶をお供えますが、正式には左側にお茶、右側はお湯です。お湯といつても白湯ではなく、薬湯です。どういふものかといつと、丁子や八角などの香料をお湯で

新年早々の 位職のおしゃべり 余計なおしゃべり

昔の人はそれを知っていて、本尊さまや亡き方に薬をお供えしたんだ。

病気は薬で治す、という仏教の考え方が、薬湯というお供えからわかります。だから、信すれば病が治るとか拝めば良くなる、といった宗教には近づかないほうがいい。（住職記）

不連続シリーズ「いっぷく紹介」

みなさんへのお知らせで、少しは気の利いたことを書かなくてはと、「ことば探索」とか「仏事ひとくちメモ」とか、いろいろタイトルをつけて短文を書いてきました。でも、どのシリーズも長続きしたものはありません。そこで始めた「いっぷく紹介」の三回目です。

いっぷく紹介

松岩寺は昭和20年の戦災でほとんどの建物と仏具を焼失してしまいました。現在あるものはかろうじて焼け残ったものか、先々代と先代がそろえたものです。その中から、興味深い墨跡の一幅を機会をみつけて、紹介していきます。

の漢和辞典・諸橋大漢和辞典で調べても「西湖山」という熟語はありません。もしかしたら、この書はもともとは「西湖山〇寺」というお寺にあつて、それが流れながれて松岩寺にあるのかもしれない。ところで、さいきん読んだものに鉄舟と勝海舟のつぎのようなエピソードが紹介されていました。

西湖山 正四位 山岡鉄太郎 32×117



明治維新に活躍した山岡鉄舟が死の床に着いていよいよという時、勝海舟が見舞いにやってくるというのです。海舟が見舞いに来てくれたというので、鉄舟は床の上に正座して迎えた。しばらく互いの眼を見つめあっていたが、海舟が、いよいよだぞうだな、と言つと、鉄舟は、そのようだ、と答えた。また、しばらく沈黙があつて、「ではお静かに……」

そう言つて、海舟は去つていったとか。死にゆくものをこのように自然に送ることができたら、いや、こんなふうには死んで行けたら、どんなに心安いことだろうか。（中島教之著「死にぎわからの進一歩」『在家仏教』誌所収）

これは名人達人のなせる技だから、凡人にはほど遠い心境だけれども、そんな方の書だと思つて、もう一度見上げてみると、ますます力強く迫ってくるのです。

今回、ご紹介するのは山岡鉄舟筆「西湖山」です。本堂の向かつて右側の欄間にかかつている横額です。山岡鉄舟（一八三六〜一八八八）は幕末に旗本の家生まれの武士で、二二歳の時、江戸へ進軍する官軍の西郷隆盛と静岡で会つて、江戸城明けわたしの下交渉をします。維新後は明治天皇の教育係となり、その功績から子爵に任じられる。鉄舟は剣の達人であり、坐禅もし、書もよくしたといわれます。誰から書を頼まれても、拒むことなく筆を執つたといえます。書のお礼をいざと、金額を確かめることもせず、書斎にある木箱に無造作に入れておいて、困つた人に会うと分け与えたとか。小川町の料亭二葉の名物料理、忠七めしを命名したのも鉄舟です。鉄舟の伝記小説としては、直木賞作家・山本兼一さんの近著『命もいらす名もいらす』（日本放送出版社刊）がおすすめです。

さて、松岩寺本堂にある「西湖山」です。どういった由来で、本堂にあるのかわかりません。ことばの意味も、恥ずかしながら勉強ものには不明です。富士五湖に西湖（さいこ）はあるし、中国にも景勝の地として西湖（せいこ）があるけれど、世界最大